

歌仙家集本『赤人集』の一伝本

—新出伝本の本文とその位置づけ—

はじめに

『万葉集』第三期歌人の山部赤人は、『古今和歌集』序文で「歌の聖」柿本人麿とともにその名をあげられ、歌仙の一人として選出されることとなる。そしてその赤人（平安期は「山辺赤人」と記される）の家集として、平安期に編纂されたのが『赤人集』であるが、それは、『万葉集』巻十の前半部分の平安期の訓読本文が何らかの事情で『赤人集』と誤認されたと見られ、赤人の『万葉集』の実作がほとんど収録されていない特殊な家集であった。その『赤人集』の現存伝本は、大きく次の三系統に分類される。

- 第一類本 西本願寺本系統 ……三五四首
- 第二類本 資経本系統（歌仙歌集本系統を含む） ……二五二一首
- 第三類本 陽明文庫蔵（近・サ・六八）本 ……二四一首

このうち、第一類本と第二類本は、『万葉集』巻十の和歌に赤人実作歌を数首加えた歌集として共通しており、共通の祖本から派生したものと見られる。また、第三類本は、同じく『万葉集』巻十の和歌を収録しているが、山崎節子氏が指摘しているように、赤人実作歌を一首も含まず、配列も『万葉集』に近いものとなっている。

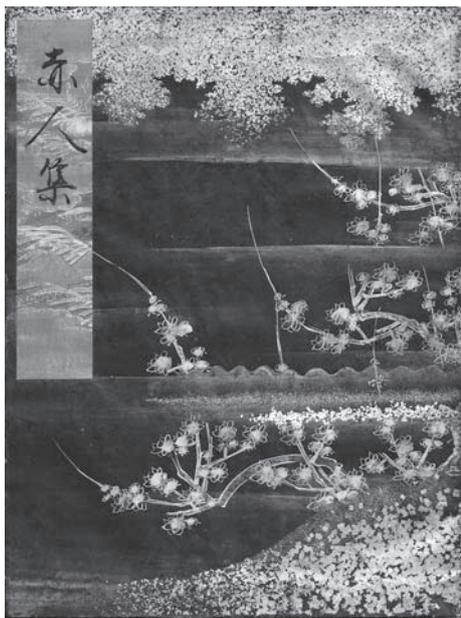
第一類本と第二類本の相違は、第二類本とほぼ共通する二五〇首ほどの歌群の前に、第一類本は一一六首の歌群があり、『大江千里集』の歌がそのほとんどを占めているのである。

このたび取り上げる『赤人集』は、朝比奈英夫所蔵本（以下、朝比奈蔵本と略称する）で、所謂歌仙家集本系統の一伝本である。これについて、書誌

及び歌仙家集本系統について触れてから、当該伝本の意義について述べたい。

一、新出『赤人集』の本文について

朝比奈蔵本は、江戸前期、おそらく寛文期頃の書写と思われる列帖装の一帖。表紙（左の写真）は、鉄紺色地に金泥・雲母刷り・金箔散らしで、草木や梅木を金泥で描いている。大きさは、縦二四・三センチ×横一八・二センチ。題簽は朱紙（縦一四・一センチ×横三・〇センチ）で「赤人集」とある。見返しは金箔地、丸型に三本の立葵の文様が見られる。料紙は鳥の子で、全二〇丁。前遊紙が一丁、後遊紙が三丁である。内題は、端作り題で、一丁裏一行目に「赤人集」とある。和歌は、全二四九首収録されている。



朝比奈 英夫
藤田 洋治

元来、三十六人集として書写されたもの一帖が『赤人集』として独立したものとされ、実際、同装同型の伝本が何集か存在し、藤田洋治所蔵『敏行集』がある外、鶴見大学所蔵『猿丸大夫集』も一連の伝本である。

本文は、一丁裏の内題に続いて二行目から、「久堅のあまのは山にこの夕霞たなびき春立にけり」の和歌で始まり、巻末歌は、「秋過てかげにもせんを故郷の花橘も散にけるかも」である。二四九首という歌数とこの和歌配列から、歌仙家集本系統の伝本であると推測が可能であるが、事実、和歌本文を精査してみると、同じ二四九首本の伝本の特徴をよく表わした伝本であることは後述するとおりである。そして、この調査を通して、歌仙家集本系統の本文の性格の一端を説明する端緒となると思われる。

二、歌仙家集本系統『赤人集』の伝本と特徴

歌仙家集本系統は、『私家集大成』CDRom版では、第二類本と分類されている³⁾。その第二類本をさらに細分すると、次のようになる。和歌配列はほぼ一致しているが、収録和歌の相違を基準に分類したものである。

- a系 冷泉家時雨亭文庫蔵資経本系 二五一首（以下、資経本と略称する）
- b系 京都大学蔵本系 二四九首
- b'系 正保版本系 二四七首
- c系 内閣文庫B本系 二六四首

（二二七首に『雖入撰集不見家集哥』二七首）

この四系の収録和歌の相違を一覧したのが下段の表Iである。

この一覧から、大きくa系の二五一首本の形態から、二首脱落したのがb系で、そのうち、さらに一、二首脱落したのがb系の内閣文庫A本、広島大学本、真田宝物館本、b'系の正保版本や諸伝本と言いうことができる。ただ、本文を精査すると、資経本の本文から直接の書承関係は考えられず、同様の形態の伝本から派生した本文であろうという見通しを立てておきたい。

そのことは、資経本の集付とb系伝本の集付との相違からも窺うことができる。資経本は、次のような集付が見られるが、京都大学本や静嘉堂文庫本などは、歌仙家集本系統であるにも関わらず、集付は意外に多くはない。

【表I】資経本系諸本和歌異同一覧

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	通	番	号					
242	233	159	126	125	86	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	38	37	30	a	資	経	本			
あをやきのいとほそさを あしひきの山のはてらす うちつけにはるたちぬらし はるの野にかすみたなひく わかせこをわかとふらんは むめのはなしたりやなきに おみなへしさくのへにおふる はるたてはくさきのうへに はるかすみ山にたなひき 春かすみたちにし日より あをつ、らいもをたえぬと たにこえやいもおもふと みわたせはかすかの、へに むめのはなさきてちるには ほと、きすなきてひ、かは																		初・二句（本文は資経本）							
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	京	都	大	学	本		
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	静	嘉	堂	文	庫	本	
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	東	奥	義	塾	本		
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	杉	谷	寿	郎	氏	蔵	本
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	朝	比	奈	蔵	本		
○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	内	閣	文	庫	A	本	
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	b	広	島	大	学	本		
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	b	真	田	宝	物	館	本	
○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	b'	正	保	版	本			
×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	c	内	閣	文	庫	B	本	
重出 資経本65と c系二首を 一首に 脱落 c系こよ り一 一首分																		備考							

（表中の○は和歌が当該伝本にあることを、×はないことを示す）

【資経本の集付一覧】

2	新古
10	拾
24	拾
28	続古
43	新古
45	続古
56	玉 人丸
57	新古
79	続古
106	続古
152	続古
161	続古
238	玉葉 人丸歌云々

【b系伝本の集付】

京都大学本	静嘉堂文庫本	東奥義塾本	杉谷氏蔵本	朝比奈蔵本
2 新古今				
43 新古今				
57 新古今	57 新古今			
238 新勅撰				

このように、b系内で集付がほぼ一致することもこれら一連の伝本がかなり近いことを窺わせ、57番歌の集付が京都大学本と静嘉堂文庫本のみであること以外、集付は一致する。また、二四八首本の真田宝物館本は、2・43・57に相当する三箇所集付が見られるがやはり類似している。歌仙家集本系統の伝本には集付が多いものが多いが、これらの伝本はその集付が少なく、しかも『新勅撰集』までの集付しか見られない。なお、資経本の集付のうち、『玉葉集』のものはその成立時期から資経自身が書くことは不可能で、伝来の途中で書き入れられたものと考えられる。しかも資経本の集付がほぼ勅撰

集入集状況を反映しているのではなく、1番歌は『新勅撰集』、17番歌は『新古今集』というように、一見ほぼ全てを指摘しているように見えながら、完全に網羅しているわけでもない。

三、a系資経本とb系の本文

収録和歌数と集付に触れたが、さらに和歌本文についても触れておきたい。以下、具体例を四例掲げて本文の異同と、そこから考えられることを述べる。

【例一】「資」は資経本、「京」は京都大学本の略称、和歌の末尾は家集の歌番号

(資) こひしきはけなきものをいまたにもみしかくもかなあひみるよたに (216)

(京) こひしきはけなきものを今たにもとしむへしやあふへき夜たに (215)

四句が「みしかくもかな」と「としむへしや」と相違している。『万葉集』西本願寺本の訓みも「としむべしや」であり、ある段階で『万葉集』の訓みを取り入れた改訂本文がb系京都大学本などの本文となったと考えられる。もちろん朝比奈蔵本も京都大学本と同文である。

【例二】

(資) ひさかたのあまのはやまにこのゆふへかすみたなひく春たちくらし (1)

(京) 久堅のあまのは山にこのゆふへ霞たなひく春たちにけり (1)

結句が「春たちくらし」と「春たちにけり」と相違する。『赤人集』の西本願寺本では「はるたちくらし」であり、c系の内閣文庫本も「春たちくらし」である。霞がたなびいている状態を疑問で示す「くらし」よりも、春が明らかに来ていると表現したほうがふさわしいとした京都大学本・朝比奈蔵本などb系本文の改変と推測される。

以上、二例を掲出したにすぎないが、元来が同系統の本文であり、本文の異同も決して多くはない中で典型的な例を掲げてみた。『万葉集』の訓みの

影響による改訂、和歌全体の表現内容の吟味による改訂が、b系の本文には見られる。換言すれば、よりよい本文を残すために他の文献を探し、また和歌内容を吟味して、本文を変えているという二つの改訂である。

もう一点、b系の本文(というよりも歌仙家集本系統の特徴でもある)として、異文注記が見られる点がある。

【例三】

(資) なつくさのつゆわけころもまたきぬにわかころもてのひるよしもなき (147)

(京) 夏草の露わけ衣またきぬに我衣手のひるよしもなき (146)

この細字書人の和歌は、『新古今集』一三七五番に人麿の詠として採歌された『万葉集』一九九四番歌であり、『定家八代集』にも選入された著名な和歌である。おそらく『新古今集』の本文が同じ歌の異伝歌、あるいは正しい本文として注記され、それが諸伝本にも反映しているものであろう。静嘉堂文庫本・東奥義塾本・杉谷氏蔵本・朝比奈蔵本・真田宝物館本に共通してみられる注記でもある。

歌仙家集本系統内部での本文の異同は、ほとんど注意されることがないが、当然同じb系であっても僅かながら本文に異同が生じる。書写の際のミスと思われるものもあるが、本文の伝播という面から次のような例を掲げておきたい。

【例四】「静」は静嘉堂文庫本、「正」は正保版本、それぞれの略称を示す

(資) こんつひとほと、きすをやまねに見むいまやなつきてこひつ、おれは (117)

(京) もとつ人郭公をやまねに見むいまやなつきてこひつ、をれは (116)

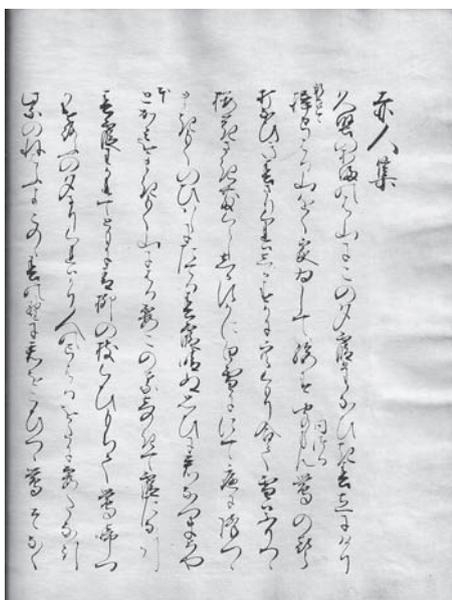
(静) もとつ人ほと、きすをやまねに見んいさやなつきてこひつ、をれは (116)

(正) もとつ人ほと、きすをやまねにみんいさやなつきてこひつ、をれは (114)

初句「こんつ人」は『赤人集』西本願寺本に「こむ ひとは」(一字分空白あり)とあり、平安期の訓みであった可能性が強い。が、一方で意味がとりにくい言葉でもある。『万葉集』に見える「もとつ人」は歌言葉として『堀河百首』などに用例があり、改められたものと見られる。もう一方の四句目「いまやなつきて」と「いさやなつきて」の相違は、推測ではあるが、「ま(万)」と「さ(左)」の字形の類似が関係しているのではなからうか。もちろん「なつきて」を修飾する語として「今や」か「いざや」か、判断の揺れもあったためでもある。京都大学本・真田宝物館本は「いまや」であり、静嘉堂文庫・東奥義塾本・杉谷氏蔵本・朝比奈蔵本は「いさや」である。そして正保版本も「いさや」の本文となっているのである。b系・歌仙家集本系統の伝本の中で少しづつ本文が変化していく様が窺えるのである。

四、新出伝本の本文性格

朝比奈蔵本は、江戸初期の書写にかかる歌仙家集本系統の一伝本である。流布本である正保版本に比べ二首収録和歌が多い本文で、静嘉堂文庫本や京都大学本と同様の二四九首本である。本文も静嘉堂文庫本・真田宝物館本・京都大学本などと、ほとんど一致する。版本にも見られる細字注記も、版本よりも多いこともほぼ一致している。これら版本以前の形態を保った伝本の



本文調査には、有益な伝本の出現であった。資経本と歌仙家集本諸伝本、また歌仙家集本諸伝本と正保版本との本文の相違を考察してゆくために、版本以前の本文が明確になることが大切だからである(上は一丁裏)。

本文の改訂という視点で、b系の本文の幾つかを指摘できれば、現存『赤人集』の資経本・陽明文庫本と西本願寺本の三系統の本文の考察から、平安期の『万葉集』訓読本文にある程度迫ることができるようになる。また、その本来の目的とは逆に、歌仙家集本系統の諸本を三系に分類し、資経本の形態（形態としては資経本のような二五一首本、和歌本文は相違するか）から派生したb系本文がどのような経緯をたどって流布本である正保版本とになっていくのか、今回の考察ではまだ不十分であるが、機会があれば論じてみたいと考えている。

赤人集〔朝比奈蔵本〕翻刻

【凡例】

- 一、朝比奈英夫蔵『赤人集』を、そのまま翻刻したものである。和歌は一行に、詞書は二字下げて翻刻し、冒頭から順に歌番号を付した。
- 二、漢字仮名を現行の文字にそのまま移し替え、原則として旧漢字、異体字は使用していないが、一部「哥（歌）」などは使用した。
- 三、仮名遣いに関しては、原本の使用した文字をそのまま用い、濁点は使用せず、またミセケチもそのまま翻刻した。
- 四、長歌は、句ごとに空白を入れて区切った。

【翻刻編】

赤人集（外題・なお内題はない）

- 1 久堅のあまのは山にこの夕霞たなひき春立にけり
- 2 梓弓新古今はる山近く家居して絶す聞聞らん鶯の聲
- 3 打なひき春さりくれはしかすかに空くもり合て雪はふりつ、
- 4 桜花さき散くらししかすかに白雪にて庭に降つ、
- 5 まきもくのひはらにたてる春霞晴ぬ思ひに若なつまめや
- 6 とかみをまきもく山にはる霞この葉しのきて霞たな引
- 7 春霞わかれてともに青柳の枝くひもちて鶯啼つ
- 8 かけろふの夕さきりくれはかり人の弓はるをたに霞たな引

- 9 紫のねはふよこの、春の野に君をこひつ、鶯そなく」(一・ウ)
- 10 わかせこをならしの山によふこ鳥君よひかへせ夜の更ぬまに
- 11 朝毎にきなくはこ鳥啼谷も君にこふらしとこなへて鳴
- 12 冬こもり春立きらし足引の山にも野にもうくひす鳴つ
- 13 春なれば妻やもとむる鶯の梢つたひてなきつ、渡る
- 14 春日なるはかひ山よりさほのうへさして行なるたれよふこ鳥
- 15 こたへぬによひなをかしそよふこ鳥さほの山へをのほりくたりに
- 16 朝霧にしと、にぬれてきけんよふこ鳥神なひ山に鳴わたる也
- 17 今さらに雪ふらめやはもかけろふのもゆる春日と成にし物を
- 18 ふ風ませに、きつ、雪はふれ共しかすかに霞たな引春はきぬらし
- 19 山きはに鶯鳴て打なひき春と思へは雪はふりしきぬ」(二・オ)
- 20 峯の上にふりをく雪は風の音もともに散らし春はありとも
- 21 つくは山をよめる
- 22 君かため山田の沢にゑくつむと雪けの水にもすそぬらしつ
- 23 梅かえに鳴てうつろふ鶯の羽白妙に淡雪そふる
- 24 山高み降くる雪を梅花ちりかもくると思ひけるかな
- 25 此哥はよみかはせる 霞をゑいす
- 26 きのふこそ年は暮しか春霞春日の山にはや立にけり
- 27 冬過て春そきぬらし朝日さす志賀の山へに霞たな引
- 28 あつさ弓春立ぬらし春日山霞たな引よめにみれとも
- 29 霜かれの中の柳は春日ともかつらにすへておもほゆる哉
- 30 浅緑染かけたりとみるまでに春の柳はもえにける哉
- 31 朝なく、わかみる柳鶯のきみて鳴へき時には成ぬ
- 32 青柳の糸のほそきを春風にみたれる色にみせんとそかし
- 33 桜花おりてもみれは我宿の柳のまゆも哀なるかな
- 34 はなをゑいす
- 35 鶯のか木伝ふえたのうつり香はさくららの花のときかたつ衣
- 36 桜花ときはすきねとみる人のこひはさかりと今や成らん
- 37 わかさせる柳の糸を吹みたる風にや妹かさくらは散らん
- 38 年ことに梅はさけ共うつ蟬の世にも我しもそはるなかりける

- 36 打つけにとは思へともはしめても先まほしき梅のはつ花」(三・オ)
- 37 足引の山の端てらす桜花この春雨に散にけるかな
- 38 打つけに春立ぬらし山本のわかきの末にさき行みれば
- 39 あの山の桜木の花けふもかも散みたるらん見る人なしに
- 40 蛙鳴よしの、山の滝のうへにあせみの花を咲てあたる
- 41 春のさし鳴谷もとに桜花ちりぬへらなるみる人もかも
- 42 春雨にあらそひかねてわか宿の桜の花は咲そめにけり
- 43 春雨はいたくなふりそ梅花新古今またみぬ人にちらまくもおし
- 44 春雨にちらまくおしき梅花しはしさかへんをもおしみてし哉
- 45 春の野に葦つにみとこしわれそ野をなつかしみ一よねにけり
- 46 いつしかもこよひあけなん鶯の木伝ひちらす梅花みん」(三・ウ)
- 47 見渡せは春日の野へに霞たちひらくる花は桜花かも
- 48 よと川のみなうき末そこまてにてるイに成までにみかさの山は明さきイにけるかも
- 49 けふみればまた冬なるにしかすかに春霞たつ雪はふりつ、
- 50 去年咲し花は今さらいたつらにつちにやちらんみる人なしに
- 51 朝霞はる日暮なは木の間より移ふ月をいつかたのまん
- 52 春霞たな引けふの夕月夜きよくてるらん高円の山
- 53 春くれは木かくれおほき夕月夜おほつかなしや山陰にして
あめをゑひす
- 54 春雨にありける物を立かくれ妹か家路にこの日くらしつ」(四・オ)
- 55 春雨に霞たつめりあをしは春のおほきに雨のふるかも
- 56 春の野に心のへんと思ふとちこしけふの日は暮すもあらなん
- 57 百敷の大宮人はいとまあれや桜かさしてけふもくらしつ
あへるをよろこぶ
- 58 住吉の里ゆきしかは初花のいとまれにみん君にあへるかも
かうへをめぐらす
- 59 かすかなるみ笠の山の月も出ぬかもせき山にさける桜の花もみるへく
ふるき身をなけく
- 60 冬はすき春はきぬれと年月をあらたまれとも人はふり行」(四・ウ)
- 61 春山にゐる鶯のあひぬれ本ノマかへるまつまの思ひするかな
- 62 我宿の木のしたつくよいもかためくもは心よしうたてこの比
- 63 我宿に春咲花の年ごとに思ひはますとわすれめやわれ
- 64 梅花咲ちる野へに我ゆかん妹かつかひはわれを待らん
- 65 藤浪のさく野へことにはふ葛の我はよはひは久しくもあれ
- 66 春の野に霞たな引桜花うちなるまてにあはぬ君かな
- 67 我せこをわれこふらんはおく山のあせみの花の今さかりなる
- 68 梅花したり柳にこきませて花にけふるは君にあるかも
- 69 女郎花さく野におふる白つ、ししらぬこともていひしわかこと」(五・オ)
- 70 春たては草木のうへにをく霜露イの消つ、われはこひや渡らん
かすみによす
- 71 春霞山にたな引かくす妹をあひみて後ぞ恋しかりける
- 72 春霞たちにし日よりけふまてに我こひやます人めしけきに
- 73 青つ、らいとをたえぬと春の日に霞立まふけふくらしつ、
- 74 たにこえやいもおもふと霞たち春の日くらし恋わたるかな
- 75 見渡せはかすかの野へにたつ霞たてれあれ共君か心に
- 76 恋つ、もけふはくらしつ霞たつあすの春日をいかてくらさん
雨によす」(五・ウ)
- 77 我せこにこよひてすへなき春雨のふるわさしらすいて、くるかも
- 78 春たてはしけし我恋わたつうみの立白浪にちへそまされる
- 79 おほつかな君にあひみてすかのねのななき春日を恋わたるかも
- 80 今更に君はよもこし春雨の心を人のしらすらなくに
- 81 春雨の心も人はしりぬらんぬかしふらはな、よこしとや
- 82 梅花ちらす春雨おほくふるたひにやいもか家あをるらん
- 83 くにくす、かわかなつまんとしめし野にあまの君かよきりころ本マひ
雲によす
- 84 しらま弓今春の野に行雲のゆきやわかれん恋しき物を

- 85 ますらおをふしみなけきて作りたにしたり柳のかつらせよ妹
わかれをかなしふ
- 86 朝戸いて君か姿をよく見すはななき春日を恋や渡らん
とひこたふ
- 87 春山のあせみの花のにくからぬ君にはしめやよかれはこひし
いそのかみふるの社の杵にしを我さらくくにこひにあひにける
- 88 此哥かへしあらすとてかへせる か、れはこの次にいれたる也
- 89 さ野かたは身にならすとも花にのみ咲てなみせそこひの草そも
さのかたは身になりにしに今更に春雨ふるへし花さかんやは
- 90 あつさ弓ひきつへき夜はなつかきの花咲までにあはぬ君かな 「(六・ウ)
- 91 川上のいつものうらのいつもくきませわかせこ絶すまつはた
- 92 春雨のやます降おちて我こふるわかひもひさにあはぬ比哉
- 93 我いもをこひつゝをれは春雨のたれもるとてかやますふりつゝ、
- 94 春くれはまつ鳴鳥の聲のことまつさき立し君しまたる
- 95 あひ思はぬ人をやつねにすかのねのななき春日を恋やくらさん
- 96 あひおもはすあらんかゆへに玉のをの長き春日を歎きくらしつ
たとひ哥
- 97 春霞たな引野へにわかひけるつなははまつな絶んと思ふな
夏雑哥ともを衛公す 本ノマ、
- 98 ますらおの いてたちかゝふ しめのをと 神なひ山に あけたては
くは野^本さひたに 「(七・オ) ゆふされは こちしの末に きすくまう
ひえし さかまなかるなに
- 99 反哥
旅に出て妻こひすらし子規神なひ山にさよ更けてなく
これはふる哥の中にいれにり
- 100 時鳥啼はつ聲はわれきかんさ月のたまにまさてぬきてん
朝霧のたな引野へに足曳の山郭公いつきてかなく
- 101 あし曳のやへ山越てよふこ鳥啼やなかるやくならなくに
藤なみのちらまくおしき郭公いまきの岡に鳴てゆくらん
- 102 木かくれていもか垣ねに時鳥啼ひ、かして聲やまとはん
朝霧のやへ山こえて子規卯花かくれなきてゆく也 「(七・ウ)
- 103 あひかたき君にあへるとき時鳥いつこを家と啼渡らん
月清み啼子規みんとおもふわか里もやあるみん人もかな
- 104 時鳥今朝のあさ霧啼つるを君またきかすいやはねつらん
郭公はな橋の下にねてなきしひ、けは花はちりつゝ、
- 105 五月山卯花月夜時鳥なけともあかす又もなかなん
よひのまはおほつかなきを子規鳴なる聲の音のさやけさ
- 106 卯花の咲までおしき時鳥野にいて山にいてをれかなきかす
山里に啼てまつらんほど、きすななくことのなきもおもほゆ
- 107 物思ふとねざる朝けに子規わか衣手にき啼をりつゝ、
もとつ人子規をやまれにみんいまやなつきてこひつゝをれは 「(八・オ)
- 108 橋の林の中にほと、きすつねに冬まですみわたるへく
あままれ雲にたくふ時鳥かすかをさしていま啼渡る
- 109 かくはかり雨のふるをやり規うの花山になをかなくらん
せみをゑいす
- 110 た、ならぬおりになかなん空蟬の物おもふおりに啼くつゝ、そをる
はしはみをゑいす
- 111 おもふらん心も空に匂ひぬとしまのはしはみ秋た、ね共
詠花
- 112 風に散はな橋をてにうけて君かみためとおもひぬるかな
かくはしき花橋をはなにぬひおちこん物をいつとかたのまん 「(八・ウ)
- 113 時鳥啼てひ、かす橋の花ちる宿にくる人やたれ
我宿の花橋はちりにけりくやしきことにあへる君かな
- 114 野へみれは撫子の花散にけり我まつ秋はちかつきにけり
わきもこかあふちの花は散にけり妹はきけるかことととかきく
- 115 春日の、藤はちりにきなにをかも御狩の人の折かさ、ん
時ならて玉をそぬける卯花の暁はまた散はてぬへし
- 116 とひ哥
卯花のさける塙ねは時鳥なきてそ渡る人はき、つや

- 131 き、つとや君にとひつ、子規ぬれつ、今ぞ鳴わたるなる
草によす 「(九・オ)
- 132 人ことは夏の、草と茂くとも妹とわれとしたつさはりなは
この比の恋のしけらん夏草のかりはらへ共生茂ること
- 133 たくひあらはふなつのしけみかく恋はほとわか命つねならめやは
われのみやく恋すらんかきつはたつくといふ妹はいか、あるらん
たとひ哥
- 136 橋の花ちる里にかよひなは山子規ひ、かさらんか
なつあひすくとりによす
- 137 夏なれはすくくなつなり時鳥ほとく妹にあはてきにける
五月山花橋に郭公かすそふ時にあへる君かも
- 139 時鳥なくやさ月のみしか夜も独しぬれは明しかねつも 「(九・ウ)
- せみによす
- 140 日晩はとこはになけと君恋てたをやめりしを花にたまらす
花によす
- 141 かたよりに糸をこそよれ我せこか花橋をぬくとおもへて
時鳥かよふ壻ねの卯花のうき事あれや君かきまさぬ
- 142 卯花のさくとはなしにあた人の恋や渡らんかた思にして
われこそはにく、もあらめ我宿の花橋をみにはこしとや
人しれすこふれはくるし撫子の花さき出よあさなくみん
- 145 夏草の露分衣またきぬに我衣手のひるよしもなき
秋のさうの哥 「(十・オ)
- 147 天川みなそこまてにてらすふねつみに舟人妹とみえずそ
久堅のあまのかはらにぬるとものうらひれおりつくるしき迄に
我こふる妹は香に行舟のすきてくやしやこともつてなみ
大空にたなひくあめのかすみれは人のつまゆく我にあひぬへし
天河やすのかはらに舟うけて秋をまつとは妹つけよとて
空よりもかよふ我ゆへに天のかはみそなつみてそくる 本マ、
やちしほの神の御代よりも、なき人としらせにきたりつけしも
わか恋にほにあげてみんこよひ我あま川はしの今はこしまと
- 155 をのかいもなかしとはき、つてにまきてまたき、てねよ君まさにとなし
天地とわけし時よりわか妹にそひてしあれはかねをまつかな 「(十・ウ)
- 156 なかこふるいもか姿はあくまてに袖ふり見えつ雲か、るまで
むは玉のよる雲くもりくらく共いもかことをはやくつけてよ
夕つ、くもかよふ空までいつとてかあふきてまたんつき人おとこ
160 天河水かけ草の吹風になひくとみれは秋はきにけり
我またぬ秋はきまきぬいまたにもほひにゆかんならしかてらに
わかせこにうらひれをれは天河舟こき渡す音聞ゆ也
163 天河こそ渡りのうつろへは川瀬をゆきて夜そ更にける
むかしわかあけて衣をかさへさねはあまのかはらに年そへにける
165 あまのかはよふねうかひて明ぬともあはんとおもふ秋袂かへさん
とをき妹と手枕やすくぬぬるよは鳥啼なあけはすくとも 「(十一・オ)
- 167 あひみまであれともあかすしの、めのあけにけるしを舟てせんいも
萬代をたつさはりあひみんと思ふへしやは恋すらなくに
169 万代をへたつる雲とくもかくれくるしき物をあはんと思は
白雲をいくへへたて、とひくともゆふかけてみん君かあたりを
我ためにたれはたつめのやとにおるしらぬはおひとかんかも
171 君にあはて久しく成ぬをりおせし白妙衣あかつくまてに
172 天河梶音きこゆ彦星の七夕つめとこよひあふらし
173 秋立て川霧渡る天川むかひにきつ、こふる日そなき
174 一年になぬかの夜のみ逢人のこよひもあはねはよ更行かも
175 天河やすのかはらにさたまりてか、る別はとくとまたなん 「(十一・ウ)
- 177 七夕の糸をはた、てをる布のあきたつ衣誰かとめてきむ
年にありて妹にまたなんむは玉のよるよりくもる遠き繩手を
178 我まちし秋はきたりぬいもせことなにごとあらんさしむかひあて
あせすしてけななき物は天の川へたて、又やわかこひをせん
181 彦星と七夕つめとこよひ合天河原に波たつなゆめ
182 秋風の吹た、ぬよの白雲は七夕つめのあきつきぬかも
183 しはくもあひみぬ君は天川ふなてはやせよ夜の更ぬまに
184 秋風のきよき夕にあまのかは舟漕渡る月のひとおとこ

185 天河霧立渡るひこほしのかちをとときこゆ夜の更くけは
 186 君か舟いま漕でこしき天川霧立わたるこの川のせに「(十二・オ)
 187 秋風に川波たつなた、しはしやそ舟のへにみ舟と、めん
 188 あき風に川かせきよしひこほしの今朝漕舟に波のさはくは
 189 天川かはへに立て我待し君きたるなるひもときてまで
 190 あまの川かはせにまして年月をこひつる妹にこよひあふかも
 191 あすからは我玉ゆかを打はらひ君とふたりはねす成ぬへし
 192 天の原ゆきてやいもとしらま弓ひきてかくせる月人おとこ
 193 この夕ふりくる雨はひこほしのとく漕ふねのかひのしづくか
 194 あまのかは八十瀬よりあふ彦星のときに行舟今や漕らん
 195 風吹て川なみ立ぬこく舟に渡りもきませ夜の更けぬまに
 196 天河うちはしわたすいもかいゑちへて我おもふ妹にあへる「(十二・ウ)
 197 夜半や先かよはん時またすとも
 198 天河うちほしわたすいもかいゑととまらすかよへ時またすとも
 199 月をへて我おもふ妹にあへる夜はこのなぬかひのつきをさるかも
 200 年にもてわか舟渡る天河風は吹とも波たつなゆめ
 201 あまのかは風は吹とも我舟はとく漕よせよ夜の更ぬとき
 202 よしこよひあへる時たにこと、はん待もせすらし夜も更けにけり
 203 天河白浪たかく我こふる君か舟出はいまそすらしも
 204 春霞君まちかねて天河うちはしわたし君にあはすは
 205 天河霧たちわたり七夕の雲の衣のあへる空かな
 206 いにしへのおりにしはるたをこの夕衣にぬひて君まつわれを「(十三・オ)
 207 あしたまも手たまもゆらにをるはたを君が衣にぬひきせんかも
 208 よき月日あふよしあれは別路のおしかる君はあすさへもかな
 209 天河わたるをふかく舟うけてさしくる君か梶をとそする
 210 あまの原よふかくなれは天河霧立渡り夜ふかかへし
 211 天河渡るせことのみつぐらの所は君をゆきてみんとそ
 212 久堅のあまのかはらに舟うけて君まつよるはあけてまたなん
 213 天の川あしぬれ渡る君か身も枕もせぬはよの明ぬかも
 わたしもり舟わたしをとよふ聲のゆかぬなるへしかち音のせぬ

214 天河我むきたちてこふらくにことたにつけんつまことしなは「(十三・ウ)
 215 恋しきはけななき物を今たにもとしむへしやあふへきよたに
 216 まけなかく川にむかひてありし袖こよひむかんと思ひしかよそ
 217 天川渡るせことのしづくらしくものしるしのありとおもへは
 218 ひとさへやみつからくらむひこ星の妹よふ聲の近つきぬるを
 219 天河瀬をはやみ見んむは玉のよるはあけつ、あはぬひこ星
 220 渡し守舟はやわたせ一とせに二度かよふ道ならなくに
 221 恋するはけななき物をこよひたにくる、へしやはとくあけすして
 222 七夕のこよひあけなはつねのことあすをもまたて年はこゑなん
 223 漢川七夕わたすふなはたのこれはたさんに七夕わたせ
 224 天河ことうちやりついつれをか君かかけをも我まちわかん「(十四・オ)
 225 秋風の吹にし日よりあまのはら瀬に立出て待とつけこせ
 226 あまのかはこそその渡りはありけるを君かきたらん道のしらなく
 227 ひこ星の妹よふ聲のひくつなのたえんと君を我おもはなくに
 228 渡しもりふなてしゆかんこよひのみあひみて後はあはぬ物かは
 長哥
 229 天地の そめし時より 天の川 いかんかひすへて ひと、せに ふ
 た、ひ あはぬ つまこひに 物思ふ人は あまの川 やすのかはらに
 ありかよふ 渡りにくほ舟の ともにもへにも ふなよそひ まかちし
 けぬき はたあらし もとはくもよに 秋風の ふきくるよひに 天の
 川 しら波しのき おちたきる はやせ「(十四・ウ) をわたり 若
 くさの つまたまくらに おほ舟の 思ひたのみて こきくとも この
 おのこはらか あら玉の 年をなかく 思こし 恋はつきなん ふんつ
 きの なぬかよひは われもかなしも
 かへし哥
 230 こまにしきひもときやすきあまの妻待よひそ我も思はん
 231 天地と 分し時より 久堅の あましるしとて 大きみの 天のかはら
 に あら玉の 月をかさねて わきも子に あふときまつ たちまちに
 我衣手を 秋風の 吹しかへさは たちゐます たきつせしらす むら

- きもの 心もほとす とき、ぬの 思ひ」(十五・オ) みたれて い
 つかとも 我まつこよひ 此川の ゆきてなからも ありえたるかも
 232 天川よとさらすたつ霧の思ひすくへきことならなくに
 233 春た、は若なつまんとしめし野に昨日も今日も雪はふりつ、
 234 けさざりてあすはきなんといひしかとかきつき山に霞たな引
 235 こらかなにつけのよろしきあさつまのかた山きしに霞たな引
 柿本人丸哥とそ
 236 打なひき春立ぬらし我宿の柳か枝に鶯なくも
 237 山きはに鶯なけは打なひき春と思へは雪ふりしきぬ
 238 新勅撰 山もとに雪はふりつ、しかすかにこの川柳もえにけるかも
 239 花はさき梅はちらねとなかけくにおもほゆるかな山吹の花」(十五・ウ)
 藤なみの咲春の、にはふ葛のしたよのこひは久しくもあり
 240 春の野に霞たな引桜花なくな子まてにあはぬ君かも
 241 桜花われはちらさてあをによし都の人のきつ、みにしも
 242 たまきはる我山のうへに立霞たちてもゐても君かまにく
 243 あひ思はぬ人をやねたくすかのねのなき春日を恋しくらさん
 244 時鳥いとふ時なくあやめ草かさ、ん日よりこ、になかなん
 245 ひこほしかうちむる妹かことたにもつけにそきつるけふはくるしも
 246 なからふる妹かすかたはあくまてに袖ふりはへて雲かくるまで
 247 我かくすかちさほなくは渡し守舟かさんやはしはらくの事も
 248 秋過てかけにもせんを故郷の花橘も散にけるかも」(十六・オ)
 249

注

- 一 竹下豊『新編私家集大成』「解題」(エムワイ企画、H20)。
 二 「陽明文庫蔵(二〇・六八)『赤人』について」(『和歌文学研究』第四七号)。
 三 注一「解題」。

この論文は、科学研究費補助金(基盤研究C)「平安期における『万葉集』
 訓読本文の研究」(課題番号23520259 研究代表者 京都光華女子